

日ハバロフスク駅より、ナホトカ第二収容所へ二月十九日入所す。四月六日、乗船のために我が名を呼ぶ声を聞き漏らさじと耳を澄まして待つ。タラップはどう上ったか記憶なし。兵隊さん、長い間ご苦労さまでした、と船員、看護婦さんに迎えられ乗船す。間もなく出航す。船内は平穩であつた。四月十日春雨に濡れた舞鶴へ上陸す。

四月十四日帰郷、会社に復職する。悲喜こもごも、思えば幾年月の流れに打ちかつてこれたのも、捕虜生活を支え何のそのと頑張ってきた。生活は貧しくとも順調であつた。

この思い風化させまじ

新潟県 田村 富三

昭和十九年九月十五日、現役兵として仙台東部第二十七部隊（野砲隊）に入隊、同十月ソ満国境守備隊要員として旧満州国羅北鳳翔第四一部隊（野砲連隊

水馬大佐）に配属され、通信の教育、訓練を受ける。班長の説明によると、この部隊はソ満国境に最も近い位置で、対岸（黒龍江）のソ軍兵の姿が見えるのとことであつた。同年十二月初年兵の第一期の検閲も無事終わり、どうにか一人前の兵士として北満の地での訓練に励んだ。

話が前後しますが、最近になって知つた当時の終戦間近の部隊の内容は、昭和二十年七月十日付で新たに編成され、野砲兵第百三十四連隊、通称勾玉二五二六九で、編成地は佳木斯で、終戦時の上級部隊は第百三十四師団で、連隊長は渡辺少佐であつたとのことである。

なお、当時の国境守備隊砲兵は、独立混成第七十七、七十八旅団砲兵隊に富錦駐屯隊の砲兵で編成され、その内容は、三個大隊で野砲二十七門、定員千六百余名、馬匹千二百余頭だったというが、ソ軍との開戦時（八月九日ソ軍侵攻）の充足状況は四割程度の戦力で、根こそぎ動員（南方移送）の典型的部隊だったという。

私は、昭和二十年五月（桜演習途中）に佳木斯の第

八二四部隊の教育隊に配属されて教育を受けていた。

同年八月上旬（日程不詳）第八二四部隊が急遽佳木斯を出発、方正に集結するため連日強行軍が続いた。八月十日前後だったと思う。ソ軍機が頻繁に飛来して日本が無条件降伏した旨の宣伝ビラを投下したが、だれ一人として信じる者はいなかった。しかし八月十五日に中隊長が日本が降伏した事実を説明、軽率な行動をとらぬよう注意があった。そのときの驚きは大変だった。一瞬茫然となり全身の力が抜けるような感じがした。集結地の方正に着いたのは翌日ころだったと思う。方正でソ軍の立ち会いで武装を解除され、そのときからソ軍の監視下となった。まさに断腸の思いだった。

方正で幾日か野営が続いたころ、ソ軍将校が、日本兵士はシベリア経由で安全に送還することになっているから心配しないで指示に従うよう、まことしやかに説明したが、半信半疑で聞いていた。九月上旬から部隊のシベリアへの輸送が始まった。貨車に干し草を敷き家畜並みに列車に閉じ込められて、シベリアの大草原をひた走ったようだった。

ようやく着いたところは、ドルミンとかいう大森林地帯のど真ん中だった。太い丸太で組んだ倉庫のような建物が並び、周囲には三メートルくらいの高さで三重の有刺鉄線を張りめぐらした、まさしく獄舎であった。隅々には望楼があつて歩哨の兵士が機銃を構えていた。この収容所に入つたとき、とても生きて帰れる場所でないとも思った。

到着した日と翌日は収容所内の整理や清掃だったと記憶している。そのうち作業班が編成されて、二人引きの大きなノコギリとオノを渡された。両方とも赤くさびていた。なれない伐採作業、しかも空腹で極寒の中での作業であつた。

一カ月くらい経過したころから、作業現場に近い森林の中に作業事故や病で亡くなった戦友の墓標が並び、日を追うごとに多くなっていく。明日は我が身と思うことがしばしばでした。あるとき若い命をシベリアの地に散らした戦友の魂は、どこをさまよっているのだろうか、思いめぐらすと胸が痛みます。

ドルミンの収容所生活が約一年半くらい経過したこ

る、次の収容所はハバロフスクの第五二七労働大隊（赤軍直轄とのこと）であった。ハバロフスクはシベリア東部の中心都市で、収容所はその中央に位置していた。収容所の裏手には日本新聞社（民主化運動の拠点）があつて、ここからシベリア全土の各日本人収容所に日本新聞（主として反軍、反米、親ソが内容）を配布していた。特に民主化がおくれていた収容所には、活動的なオルグを派遣するなどしていたようだ。

大森林の中から都市部の収容所に移り、環境が多少ながら改善されるものと期待したが、全く改善されず、飢餓と不衛生の状態は続き栄養失調が多かつた。この収容所は赤軍直轄というだけに、ノルマ、ノルマで厳しく労働を強いられた。日本新聞社から毎日オルグが出入りし、所内の民主化を扇動して、特に若い者の心を巧みにとらえて、そのとりこにしていた。恥ずかしいことながら私もそのとりこになった一人であつた。労働大隊の職種は主として建設工事場の雑役やれんが工場、農作業の雑役といったように、特殊な技術者以外はほとんどが雑役のような仕事で、作業量は多かつ

た。

大切にしていた万年筆や時計などもハバロフスクに移る以前にわずかな量のパンとなり消えて、空腹を満たすすべはなく、私は十五キロも体重が減り、時折高い熱が続いた。そのことを知った隊長の計らいで、幸運にも所内の経理室勤務となることができた。相変わらず高熱は繰り返したが、自然のうちに健康は回復した。

昭和二十三年十一月、これまで幾度か夢に見た帰還のときがきた。この情報を耳にしたときの喜びは表現できない。極寒の季節を目前にしての朗報に、みんな小躍りして喜んだ。いよいよ飢餓、拘束の生き地獄から解放されると思うと、その夜はうれしさでまんじりともしなかつたことを覚えている。ナホトカで乗船名簿に署名して乗船した復員船は「信濃丸」だつた。

十一月の日本海は季節風で船の揺れも大きかつたが、帰心矢のごとしで、心は早くも故郷へと飛んでいた。船員にあれが能登半島だと教えられ、本当に帰ることができたのだと実感し胸が熱くなつた。冬景色に染ま

る舞鶴港に近づき栈橋に着いた。船員の皆さんありがとう、信濃丸ありがとう、と幾度も一人つぶやいた。栈橋を渡るとき、とめどなく涙がこぼれた。

栈橋にこぼす涙や冬紅葉

ともあれ母待つ祖国へたどり着くことができた。一日も欠かさず陰せんを供えてくれた母も三十年前亡くなり、私も古稀の峠を越えた。余りにも悲惨で文字にできなかったことも多くあった。地獄絵図のシベリアを体験して、この思いを決して風化させたくないと思う一人です。

私のシベリア抑留

岐阜県 杉山 博

一、昭和十九年八月十五日、滋賀県八日市市第八航空教育隊（中部第九八部隊）に入隊、第七中隊、第三中隊に所属、戦闘機の整備教育を受ける。

二、昭和二十年一月二十五日、原隊復帰により、哈爾

濱市第二六教育飛行隊（第一六六一六部隊）に移る（我々の原隊）。

昭和二十年三月、派遣により拉林第一二野戦航空修理廠へ移る。戦闘機整備教育のため。

昭和二十年七月、教育を終え、原隊復帰のため桂木斯第一〇野戦航空修理廠へ移る。原隊が同所移動していたため。

昭和二十年八月、ソ連の侵攻により、十日ごろ無蓋車にて哈爾濱に向けて南下する。哈爾濱の近くの平房の飛行場に入り終戦を正式に知らされる。そして、武装解除を受け、捕虜となる。

三、昭和二十年八月下旬、徒歩にて阿城に至り、汽車に乗り北に向かう。一面坡でおろされ、その後、一週間歩きつめで、捕虜収容所である海林の弾薬庫跡に入る。

昭和二十年十月牡丹江に移り、ソ連の蚕棚のような貨車に乗せられ、虎林、虎東を通りソ連領に入り、シベリア鉄道を一路北に向けて進み、ハバロフスクを経て西進し、十日ほどしてイズベストコーワ駅に着き